民俗学（水４）

Ｚ　生活史作成の注意

菊地暁 folklore.lecture@gmail.com

＊成績評価

・本講義の評価は、期末レポート（60 点満点）およびミニアンケート（4 点満点×10 回＝40 点満点）によりおこなう。

・レポート課題「おじいさん or おばあさんの生活史」（字数　3000 字以上）

本講義で学んだ民俗学の考え方に基づき、おじいさん、もしくは、おばあさんより聞き取りをおこない、その生活史を作成する。

（受講生本人の祖父母からの聞き取りが望ましいが、諸事情により困難な場合は祖父母世代と同年代の他人でも可）

・締切　2026 年 1 月 7 日（水）までにメールで提出すること（受信確認のため空メールを返送する）

タイトル「2025 京大／学部頭文字／回生／氏名／ライフヒストリー」とする。例：2025 京大経 1 伊藤修二ライフヒストリー

添付ファイル提出可（期末レポートのみ）

＊生活史（life　history）

「現在にいたるまでに個人がたどってきた経歴を、一定の項目（例えば、家族歴、学歴、職歴など）を含めた上で、本人や聴取者により作成された自分史のこと。個人は、自らの社会的生活を、客観的な制度と主観的な体験との間の相互作用として経験するが、その相互作用の過程を、個人の側から記述したものをいう」（三田宗介他編 1988『社会学事典』弘文堂）

・生活史の効用：①もっとも基礎的な生活事実の単位として②データの信頼性を図る目安として③調査ストラテジーの参考に

・生活史の叙述方法：対象となる<u>個人の来歴そのもの</u>と<u>聞き手の関心</u>の個別性に従って千差万別となる。ゆえに、<u>定型はない</u>。

＊よくある問題／評価の目安

・文字資料を主たる資料として作成された生活史　→　<u>聞き取り</u>を実施すること

・生家や本人の家族構成、居住地、学歴、職業等の基本情報の欠如　→　<u>基本的な事実確認の的確さ</u>

・文体の冗長さ　→　<u>文章表現・構成の簡潔さ</u>　　cf.「こざね法」by 梅棹忠夫 1969『知的生産の技術』岩波新書

・一般的な事実関係の煩瑣な説明　→　<u>話者の体験の重点</u>を置くこと、背景説明は簡潔に

・「感動した」等の記述者側の感情表現→　記述者側の<u>感情表現は抑制</u>して、感動に価した<u>事実のほうを丁寧に描く</u>ことが肝要

＊聞き取りのヒント

・地図を活用する：cf. 国土地理院「地理院地図（https://maps.gsi.go.jp/）」（1940 年代以降の航空写真）

・写真アルバム等を活用する：記憶は具体的事物によって喚起される。レポートには「関連する」写真を添付したほうがベター。

・AV 機器を活用する：自分の記憶を過信しないため、録音・録画は効果的

＊注意事項：調査は「話者」にとりしばしば「迷惑」である。　cf. 宮本常一・安渓遊地 2008『調査されるという迷惑』みずのわ出版

＊実践例　菊地暁 2000「うどんとモダン―豊中市岡町における都市民俗誌のこころみ―」『人文学報』83（KURENAI にて利用可）

菊地暁編『ライフヒストリーレポート選』京都大学民俗学研究会（2012～＋）

菊地暁編 2024『書いてみた生活史：学生とつくる民俗学』実生社

宮本常一　1984年　忘れられた日本人　岩波文庫

土佐源氏

一

「あんたはどこかな？　はァ長州か、長州かな、そうかなァ、長州人はこのあたりへはえっときておった。長州人は昔からよう稼いだもんじゃ。このあたりへは木挽や大工で働きに来ておった。大工は腕ききで、みなええ仕事をしておった。

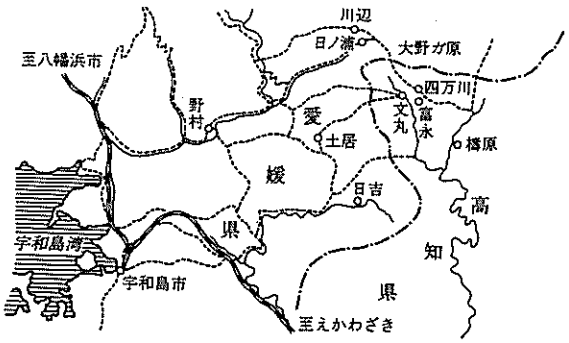
時にあんたは何が商売じゃ？　百姓じゃといいなさるか、百姓じゃァあるまい、物いいがちがう。商売人じゃないのう。まァ百姓でもええわい。わしの話をききたいといいなさっても、わしは何にも知らんのじゃ、何にもなァ。ばくろうしておったから牛や馬の事なら知っとる。しかしほかの事は何にも知らん。

どうして盲目になったといいなさるか。盲目にのう、盲目になって、もうおっつけ三十年が来る。ごくどうをしたむくいじゃよ。まァ、ずいぶん極道しよったでのう。極道がすぎて、まともなくらしもようせなんだ。

あんたは女房はありなさるか。女房は大事にせにゃァいけん。盲目になっても女房だけは見捨てはせん」

いろりには火がチロチロもえていた。そのそばに八十をかなりこえた小さい老人があぐらをかいてすわっている。いちじく形の頭をして、歯はもう一本もなくて頬はこけている。やぶれた着物の縞もろくに見えないほどよごれている。

ここは土佐の山中、檮原村。そしてこの老人のこの住居は全くの乞食小屋である。ありあわせの木を縄でくくりあわせ、その外側をむしろでかこい、天井もむしろで張ってある。そのむしろが煙でまっくろになっている。天井の上は橋。つまり橋の下に小屋掛しているのである。土間に粉がら



土佐檮原村付近

宮本常一　1993年　民俗学の旅　講談社学術文庫

父は大阪へ出してもよいと叔父に言っていた。「世の中へ素手で出ていくには身体がもと手であるから、どんな苦労にも堪えられるようにしておかねばならぬが、一年間百姓させてみてもう大丈夫だと思う。何をさせてみても一人前のことはできるだろう」。そこでその年の四月に大阪へ出ることにした。

出るときに父からいろいろのことを言われた。そしてそれを書いておいて忘れぬようにせよとて私は父のことばを書きとめていった。

(1) 汽車へ乗ったら窓から外をよく見よ、田や畑に何が植えられているか、育ちがよいかわるいか、村の家が大きいか小さいか、瓦屋根か草葺きか、そういうこともよく見ることだ。駅へついたら人の乗りおりに注意せよ、そしてどういう服装をしているかに気をつけよ。また、駅の荷置場にどういう荷がおかれているかをよく見よ。そういうことでその土地が富んでいるか貧しいか、よく働くところかそうでないところかよくわかる。

(2) 村でも町でも新しくたずねていったところはかならず高いところへ上ってみよ、そして方向を知り、目立つものを見よ。峠の上で村を見おろすようなことがあったら、お宮の森やお寺や目につくものをまず見、家のあり方や田畑のあり方を見、周囲の山々を見ておけ、そして山の上で目をひいたものがあったら、そこへはかならずいって見ることだ。高いところでよく見ておいたら道にまようようなことはほとんどない。

(3) 金があったら、その土地の名物や料理はたべておくのがよい。その土地の暮らしの高さがわかるものだ。

(4) 時間のゆとりがあったら、できるだけ歩いてみることだ。いろいろのことを教えられる。

(5) 金というものはもうけるのはそんなにむずかしくない。しかし使うのがむずかしい。それだけは忘れぬように。

(6) 私はおまえを思うように勉強させてやることができない。だからおまえには何も注文しない。すきなようにやってくれ。しかし身体は大切にせよ。三十歳まではおまえを勘当したつもりでいる。しかし三十すぎたら親のあることを思い出せ。

(7) ただし病気になったり、自分で解決のつかないようなことがあったら、郷里へ戻ってこい、親はいつでも待っている。

(8) これからさきは子が親に孝行する時代ではない。親が子に孝行する時代だ。そうしないと世の中はよくならぬ。

(9) 自分でよいと思ったことはやってみよ、それで失敗したからといって、親は責めはしない。

(10) 人の見のこしたものを見るようにせよ。その中にいつも大事なものがあるはずだ。あせることはない。自分のえらんだ道をしっかり歩いていくことだ。

大体以上のようなことであったと思う。私はこのことばにしたがって今日まで歩きつづけることになる。